

SIR DUKE

SUMMERTIME

John Kaizan Neptune &
Paula Desmond

Side 1

1 Summertime サマー・タイム

(作詞:デュ・ボース・ヘイワード、作曲:ジョージ・ガーシュウィン、編曲:J. K. ネプチューン)

2 Sir Duke サー・デューク“愛するデューク”

(作詞&作曲:スティービー・ワンダー、編曲:直居隆雄)

3 Georgia on my mind ジョージア・オン・マイ・マインド“我が心のジョージア”

(作詞:スチュアート・ゴレル、作曲:ホーギー・カーマイケル、編曲:直居隆雄)

Side 2

1 Till there was you ティル・ゼア・ラズ・ユー

(作曲:メレディス・ウィルソン、編曲:J. K. ネプチューン)

2 Manha do carnaval & Samba de Orfeu カーニバルの朝&サンバ・デ・オルフ

(作曲:ルイス・ボンファ、編曲:直居隆雄)

3 My favourite things マイ・フェイヴァリト・シングズ“私のお気に入り”

(作曲:リチャード・ロチャース、編曲:直居隆雄)

DAMPC
DOR-0151

制作にあたって

DAM会員の皆様、日頃のご愛顧誠にありがとうございます。「マニアを追い越せ/大作戦」も会員の皆様の御支援で第28回目を迎えることが出来ました事を厚くお礼申し上げます。さてDAM45オーディオ・チェック・シリーズの中でDAMオリジナル録音としては久々に、ジャズ・ポップスのスタンダード曲集を制作いたしました。

選曲にあたっては極力幅広く変化にとんだナンバーを選ぶよう心がけ、Jazzのスタンダードはもちろんの事、ポップスやバラードそしてロック調のものから、有名なミュージカルやスクリーン・ミュージックまで作曲者や年代にとらわれる事なく親しまれる曲、聴いて楽しめる曲を中心に選曲しました。

アレンジとしては「弘田三枝子76/45」(DOR0086)や「伊藤咲子・中原めいこ76/45」(DOR0117)で音楽的にも楽しく、オーディオ的にも魅力あるアレンジをしていただいた、直居隆雄さんと、S.57年に「ジョン・海山・ネプチューン・デジタル45」で登場しオーディオチェックに向けたダイナミックな尺八の演奏とオリジナル曲を聴かせてくれた、アメリカ人の尺八奏者ジョン・海山・ネプチューンのお二人にそれぞれの持味を出したアレンジをお願い致しました。

そして海山・ネプチューンには尺八、直居さんにはギター、とそれぞれ演奏のメイン奏者として参加していただき、素晴らしいソロを演奏していただきました。

ヴォーカルはポップスやロック歌手として長いキャリアを持つ実力派

シンガー、ポーラ・デズモンドを迎え、東芝EMIの第1スタジオで5月11日から16日までの5日間にわたって録音を行いました。

余談にはなりますが、S.53年の「デューク・エイセス76/45」のDAMオリジナル録音はいらぬ数多くのDAMオリジナル録音やDAM生録音会や多数のイベントなどで使用させていただき、DAM会員の皆様にもおなじみの、東芝EMI第1スタジオも、新スタジオの建設が決定したとの事で、今回がDAMオリジナル録音としては最後の録音となりました。

録音は、ヴォーカル曲とティル・ゼア・ラズ・ユーの4曲に関し、ステューダーA800を使用し76cm/sec・24チャンネルのアナログ録音がなされ、あとの2曲は三菱の32チャンネル、デジタル録音よりのアナログ・トランスファーとなっております。

ヴォーカルの入った3曲は、全体の音楽の流れと、演奏とヴォーカルの一体感を出す為に、同時録音をしましたので、雰囲気の良いスムーズな仕上がりになったのではないかと思います。

カットティングにあたっては76cm/secのマスターテープそのものをA面は半分のスピードでカットティングするハーフカットティングを採用する事が、音の点でヒヤリングの結果ベターであるとの判断からハーフカットティングを行いました。B面はヒヤリングの結果今までと同じカットティングをしております。

A面がハーフカットティング、B面がノーマルカットティングと普通の市販盤では考えられない盤になりましたので、それぞれを良さを聴きくら

べていただければと思います。

オーディオチェックのポイントとしては、ポーラ・デズモンドのヴォーカルの音域の広さと力強さ、高音の伸びの良さなどは、カートリッジのトレース能力やスピーカーの高域のチェックには最適ではないかと思っています。

他の楽器としてはヴァイブラフォンやラテン・パーカッション、ブラスやストリングスなどアコースティック楽器ならではの自然な響きと、滑らかでふくらみのある音、そして尺八と生ギターのデュオによる、立上がりや、弦の響きなど電子楽器ではえられない、アコースティック楽器独特の雰囲気バランス良く再生出来るかなど多くのチェックポイントを持ったレコードに仕上がったのではないかと思います。

なお、今回のアルバム制作にあたって、東芝EMI様の多くのスタッフの方々と関係者の方々に多大な御協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

DAM推進委員会 DAMPC

素晴らしいメンバーと演れた、 楽しく最高のセッションでした。

今回のレコーディングなどについて/ジョン・海山・ネプチューン

尺八は、五つの穴しかないという、一見、とても素朴な楽器です。ふつうの尺八の長さが一尺八寸(54.5cm)ある事から、この名が付けました。尺八は、^{まが}真竹の根元から作られ、地面のすぐ下の部分を切ると、根元はそのまま、笛の形をしています。

しかし尺八は様々な、厳しい過程をへて作られます。まず、六ヶ月から二年又は、それ以上たった竹を切り、油脂を除きます。その竹の自然のままの曲線は、たいてい修正しなければなりません。内部の各々の節は、特製ののみや、やすりで削りとりまします。尺八の寸法は、正確な音程と音色を考慮して、その内部の直径で決まります。たとえ、外側の直径は、かなり加工したとしても、内部は正確に、組立てられ、底の方へと、



少し先細りにします。勿論、五つの穴を正しく配置するのも、重要な課題で、内部の特殊な、漆加工は、熟練した技術を要します。

尺八の一番大切な、尖った吹き口の部分は、斜めに切り、水牛の角や、象牙、最近では、黒いプラスチック製のものを、差込みます。この尖った吹き口に空気、つまり息を吹込むと、空気の中で振動が起り、音が出る訳です。

尺八という名は、前にも述べた様に、その寸法からきていますが、長さの異なる、すべての笛類も、こう呼びます。このレコーディングのために、私は、一尺三寸、一尺六寸、一尺七寸、一尺八寸、二尺、そして二尺四寸と、六種類の尺八を使用しました。

標準型の尺八は、D(ニ)、F(ヘ)、G(ト)、A(イ)、C(ハ)の、各音が演奏出来ます。しかし、沢山の笛類、殊に古い物等のチューニング(調律)は、西洋音楽のものとは一致しない事があります。尺八の音域は、ふつう約2オクターブ位しか使われませんが、3オクターブまで十分、出せます。それぞれの竹が、独自の特徴を持つため、二つとして同じ尺八は、ありません。つまり、各々の尺八が、個性的なサウンドを持つという点が、大変、ユニークな所なのです。

今回、初めて全部スタンダードの曲で、レコードを作ってみました。この録音にも参加してくれた主人達と、私のグループ、"ジョン・海山・ネプチューン・クインテット"を組み、ここ数年、"スタンダード"を演奏して来ましたが、このメンバーで録音したのは、これが初めてです。

勿論、ここに集めたスタンダード曲は、尺八用に書かれた物ではなく、微妙な音程とか、よい響きを創るには、かなりの技術が必要になります。又、他にも、その曲の音域という事も、難しい問題です。つまり、そのメロディの音域が、高すぎたり低すぎたりするので、尺八のいつもの指使いでは、間に合わなくなります。

中には演奏しやすい曲もあって、例えば、12小節のブルースなどは、コード進行も簡単で、ややこしい多くのボサノヴァの曲などよりは尺八に合う様です。尺八の演奏には確かに限界がありますが、ジャズには、とても向いていると思いますし、フルートとか、ジャズでよく使われる他の管楽器などにはない、独特の趣きがあります。



今度、直居隆雄氏と一緒に仕事が出来たのは、素晴らしい事でした。私達は前にも、SHÖGUN、TWO IN FLIGHT(東芝EMI)や、JAZZEN(日本コロムビア)等で、共演した事があります。いつも彼の素晴らしいギター(繊細で、ファンキー、その上、ブルージー!)だけでなく編曲のセンスにも、感心させられます。又、彼は、スタジオに於ける専門知識にも卓越しています。彼は前に、「僕は"凄いテクニック"のプレーヤーではないけれど、趣味のよいプレイをしたいいつも思っている。」と言いましたが、まったく彼は、"最高に趣味の良い"音をしています。これからも、彼と"楽しく演る"機会が、沢山あります様に!

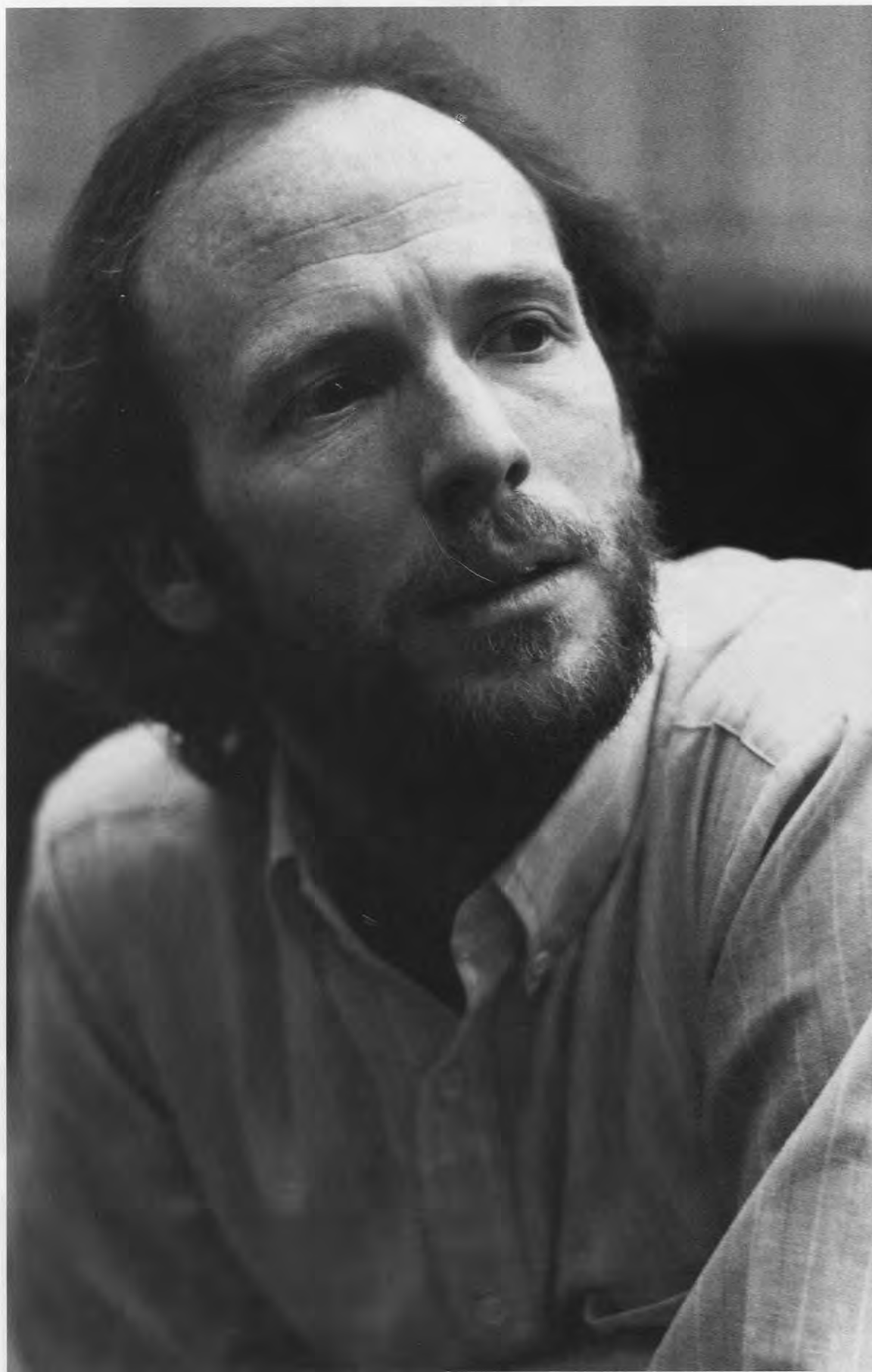
ポーラ・デズモンドさんも、私がこれから、又、一緒に仕事をしたいと思っている、素晴らしいミュージシャンの一人です。彼女自身は、自分を"ジャズ・シンガー"とは、思っていない様ですが、今回、歌ってくれたジャズのスタンダードの数々は、とても素晴らしい! もともと、ポップス・ロック歌手の彼女は、その幅広い声域と、力強い声で、どんなジャンルのものも、こなしてしまいます。ポーラは、こんどの様に、譜面をもらい、僅か数回練習しただけでレコーディングするなんて、初めてだと言っていました。当然、彼女は、





これらの曲を、前からよく知ってはいましたが、“サマー・タイム”の様に、尺八と歌がからむ、凝った編曲では、特別なセンスが、要求されます。スタジオでポーラは、「ガラス越しだと、一応、見えるけど、扉が閉ったままじゃ、皆とうまくいらないわ。」と言って、仕切りの扉をあけて歌いました。そこで私達も皆、仕切りの扉を開き、ポーラも、彼女の音楽の扉をあけて加わり、一緒に楽しいセッションとなりました。

(訳：佐藤美和子)



ジャズの感情的でホットな面は、 アナログのほうがよく味わえると思う。

ジャズとアナログ・ディスク/小林 貢

CDが登場して5年が過ぎ、今では完全に音楽ソースの主流になった感じが強い。CDの普及期は、どちらかといえばクラシック系ソースの充実が目立ちジャズ系ソースは少なかったように思う。そのためかジャズ・ファンはCDの導入が遅れ、あたかもアンチCD派のような立場に置かれてしまった。しかし現在では新録音のものや過去の名盤が続々とCD化され、しかも未発表テイクなども加えられジャズファンを喜ばせている。僕自身も2〜3年前に比べるとCDでジャズを聴く割合がずっと増えている。CDはアナログ・ディスクに比べると誰もが確実にクオリティの高いサウンドを手に入れられるようになった。僕もその恩恵に与っているのだが、余りにも手軽であるため、音楽そのもののまで軽く扱ってしまっている時があるような気がする。ジャズという中身の濃い音楽は本気で聴こうとすると、それなりの心構えが必要になる。しかし、CDではトレイに載せてプレイ・ボタンを押すだけで事が足りてしまうため時としてBGM的な聴き方になってしまう危険性を孕んでいるように思う。ところがアナログ・

ディスクでは慎重にターンテーブルに載せ、定速回転になるのを待って、これまた慎重にアームを降ろす。という動作が必要になる。これはいわば音楽を聴くためのセレモニーのようなもので、そうすることによって自分自身で音楽を聴くという態勢ができてくるようにも思う。また、ジャズの持つエモーショナルでホットな面やヴォーカルのヒューマンな味などはアナログ・ディスクのほうが似合っていると思えなくもない。

さらにアナログ系の再生システムは、それなりの経験があれば種々のチューニングを施すことができるというのも趣味としてのオーディオの面白さといえる。今ではアナログ・プレーヤーの新製品は数えるほどになっているが、カートリッジをはじめとする周辺機器のグレードアップやプレーヤーベースの強化などで自分の求めるサウンドを入手できるのはアナログ・ディスクならではの楽しみだ。最近ではDAコンバーター内蔵のプリあるいはプリメインアンプが増えているが、それとは逆にフォノイコライザーアンプの独立単機能化も見



受けられる。これは決して新しいものではないが、独立させると確実にクオリティが高まる。僕自身もフォノイコライザーアンプを独立させディスクの中にまだまだ聴きもらしていた音があることを再認識させられたのだ。またCDのクオリティはフォーマットを変えない限り、今以上のものは望めないのだが、アナログ・ディスクにはまだまだクオリティを高められる可能性がある。毎回、好企画で僕たちを喜ばせてくれるDAM45を聴くとそれを実感する。今回もまた45回転・厚手ディスクで現在考え得る最高のクオリティを確保している。本アルバムを聴くとDレンジこそCDに劣っているものの他の面ではまだまだ侮れないと思わされたのである。





■ 曲目解説

1. Summertime (A.M.)

1935年のフォーク・オペラ『ボギーとベス』のためにジョージ・ガーシュウィンが作曲、デュ・ボース・ヘイワードが作詞した名曲中の名曲でガーシュウィンは古いニグロ・スピリチュアル（時には母のない子のように）にヒントを得たという。数えきれないほど多くのアーティストが名演を残しているが、中でもジョン・コルトレーンの演奏、ヘレン・メリルの名唱、エラ・フィッツジェラルドとサッチモのデュオが有名だ。冒頭からポーラもそうした名唱・名演に負けない熱唱を聴かせてくれる。透明で張りのあるハイトーンのヴォーカルが彼女の實力の高さを物語る。

2. Sir Duke (A.M.)

'76年度のグラミー賞を獲得したスティービー・ワンダーの『キー・オブ・ライフ』に収められていた曲でデューク・エリントンに捧げられたナンバーだ。本作では余りにも有名なエリントン・ナンバーである『A列車で行こう』をイントロに使っている。ポーラのヴォーカルは力強いスイング感に溢れ原作に負けないエモーショナルな味を出している。途中のスピーディーかつスリリングなユニゾンのリフも聴きどころだ。

3. Georgia on my mind (A.M.)

有名な『スターダスト』の作者であるホーギー・カーマイケルが、1930年に作曲したバラードの名作。作詞はスチュアート・ゴードレルで歌曲として多くのアーティストが取り上げているが1960年にレイ・チャールズが故郷のジョージアへの想いを唄い大ヒットする。本作ではポーラが情感豊かに、しっかりと唄い上げているが、浜田均のヴァイブラフォンのオブリガートも効果的だ。またジョンのソロもソウルフルだ。ヴァイブラフォンの透明感のある音やアコースティック・ベースの伸びのある音がリアルに再現できるかどうかチェック・ポイントといえる。



1. Till there was you (A.M.)

1952年にメレディス・ウィルソンが作詞・作曲した美しいバラード。かのビートルズがセカンド・アルバムで取り上げヒットしているので彼等の曲とされている方も多いのではないだろうか。本作では美しい音色のアコースティック・ギターをバックに思い入れたっぷりの尺八がテーマを1コーラス奏でた後にギターがメロディを引き継ぎ、エンディングは



両者でしっかりと迎える。この美しいアコースティック・ギターと尺八のメロディは中高域の歪感のチェックに最適であろう。

2. Manha do carnaval & Samba de Orfeu (D.A.)

1960年に制作されたフランス映画『黒いオルフェ』に挿入された曲で作曲はブラジルのギター奏者ルイス・ボンファだ。一度聴くと忘れられない哀愁のあるメロディが印象的だ。ここではボサノヴァの名曲とサンバの名曲をメドレーにし、カーニヴァルの朝はアコースティック・ギターのメロディにからむ哀感を湛えた尺八のオブリガートが独特の雰囲気を生んでいる。途中から陽気なサンバの『サンバ・デ・オルフェ』へ移行し尺八の透明で明快な音色のメロディが流れ出す。ソロはマリンバで、この辺りで中高域のトランジェントが判断できそう。

3. My favourite things (D.A.)

原曲は1959年のミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』のためにリチャード・ロチャースが書きおろしたワルツだ。ジャズ界ではジョン・コルトレーンが何度も取り上げ、彼の十八番として余りにも有名。ここでは軽快なワルツのリ

ズムにノッてジョンが尺八でオリジナルのイメージを強く残したメロディを奏でている。ジョン・コルトレーンはアラビアの民族楽器の持つ鼻にかかったような音色を狙ってソプラノ・サックスを使ったというが、ここでも尺八の持つオリエンタルな雰囲気が原曲のメロディと良くマッチしている。ストリングスの漂うようなハーモニーの中を飛翔するかのようなソロが聴きものだ。

● 録音ソース

A.M.: アナログ・マルチ/D.A.: デジタル・マルチよりアナログ・トランスファー



《楽器編成》

A-① Summertime ; ヴォーカル (Vo)、尺八 (Sha)、ギター (G)、ピアノ (P)、ダブル・ベース (Db)、ドラムス (Ds)

② Sir Duke ; Vo、Sha、G、P、Db&エレキ・ベース (Eb)、Ds、ラテン・パーカッション (L Per)、トランペット (Tp) 2、トロンボーン (Tb)、アルト・サックス (A Sax)

③ Georgia... ; Vo、Sha、G、P、ヴァイブラフォーン (Vib)、Db、Ds

B-① Till there... ; Sha、G

② Manha do... ; Sha、G、マリンバ (Mar)、P、Db、Ds、L Per

③ My favourite... ; Sha、G、Vib、P、Db、Ds/ヴァイオリン (Vn) 10、ヴィオラ (Va) 2、チェロ (Vc) 2





■演奏者の紹介

ジョン・海山・ネプチューン (尺八)



ハワイで民族音楽を専攻していた1971年頃に尺八を習い始め、1977年に尺八の都山流の師範となり以来“海山”という師範名でジャズ界で活躍している。この道に入る前は南カリフォルニアのサーファーだったという。ジャズと禅の心を表現したという『ジャゼン(JAZZEN)』が最新作で今年の5月に発表している。

ポーラ・デズモンド (ヴォーカル)



サンフランシスコのアメリカン音楽学校、ニューヨークのバーゴフ演劇研究所に学び、テレビ、映画、舞台、ライブ・スポット等、幅広い経歴を有した新進ヴォーカリストだ。現在は東京のライブ・ハウスをメインに活動しているが、北村英治スウィング・エイジ・バンドと共に日本ツアーに参加もしている。

直居隆雄 (ギター)



自由ヶ丘の『5 SPOT』に学生時代から出演し鈴木勲等と共演、プロとなる。以後、大沢保郎、シャープス&フラッツ等のバンドに参加すると同時にライブ・スポットで多くのアーティストとの共演経験を持つ。1970年には渡米しエディー・ヘンダーソン、エルビン・ジョーンズ、チック・コリア等と共演、1年後に帰国し再びライブ活動を行ない現在では作・編曲でも幅広く活躍している。

浜田均(マリンバ、ヴァイブラフォン)



函館ラサール高校時代にジャズの洗礼を受ける。大学在学中もジャズに熱中し卒業後東京芸大別科で打楽器を学び終了後、猪俣猛&フォースに参加しプロとなる。フォース解散後数々のバンドやスタジオで活躍、ジョン・海山・ネプチューンの『JAZZEN』にも参加している。

長谷川清司 (ドラムス)



福井県出身、東京芸大在学中に猪俣猛とセパレーション、森寿男とブルーコーツで活躍。その後、ダン池田とニューブリードを経てフリーとなる。現在ジョン・海山・ネプチューン・クインテットのほかアンリ菅野のバックも努めている。

納見義徳 (ラテン・パーカッション)



早稲田大学在学中に学生バンドの名門『ハイソサエティー・オーケストラ』に参加。卒業後『チャーリー石黒と東京パンチョス』『見砂直照と東京キューバンボーイズ』などのラテンバンドで活躍。1975、79年にはメキシコ中南米に渡りラテンリズムを学び、帰国後『オルケストラ246』などサルサ・バンドを率いるかたわら『菊地ひみ子グループ』『バスター』『ジョン・海山・ネプチューン・クインテット』に籍を置き幅広く活躍している。『JAZZEN』にも参加している。

*二村希一 (ピアノ)



東京都出身、20才頃からプロとして活動を始め現在ジョン・海山・ネプチューン・バンドのほかレイラ・マリア・コムサウダージなどのサンバ・バンド、松尾明トリオ等で幅広く活躍中。

高尾幸宏 (ダブル・ベース)



福岡県北九州市出身、早稲田大学時代、名門『ハイソサエティー・オーケストラ』でベースを担当し『ハイ・ウェイ』のレコーディングに参加する。古沢良治郎グループなどで活躍後5年前からジョン・海山・ネプチューン・グループに参加『JAZZEN』にも加わっている。

●プラス・セクション

数原 晋(Tp.) 上野雅憲(Tp.) 西山健治(Tb.)
JAKE H. CONCEPTION(A.Sax)

●ストリング・セクション

篠崎正嗣グループ

■対訳



音質だけでなく、音楽的な完成度も高めよう という姿勢が感じられた。

レコーディングを観て/小林 貢

このディスクのレコーディングは5月11日～16日の5日間にわたって行なわれた。僕は残念ながらレコーディングの総てに立ち会うことはできなかったが、ジョージア・オン・マイ・マインド、オルフェ・メドレー、ティル・ゼア・ラズ・ユー、サー・デュークを録音した12日にスタジオに足を運んだ。普通、こういった高音質ディスクを制作する現場にはピリピリとした緊張感が漂っているものだが当日は意外なほどリラックスした雰囲気を感じられた。それは制作スタッフがチーフ・エンジニアの渡部氏をはじめ、いつもの手慣れたメンバーであったし、ネブチューン・グループも気心の知れたメンバーが中心となっていたからだろう。広いスタジオ内は尺八とピアノを取り囲むようにL字型に配置され、お互いにコミュニケーションがとれるようになっていた。ヴォーカルは音のカブリを防ぐためブースに入り完全に仕切られていたが途中から衝立が取り去られた。こうしたセッションでは音のクリアーさも大切だが、アーティスト間のコミュニケーションがより重要になる。この辺りは単に音質の良さを追求するのではなく音楽的な完成度を高めようというDAM45の姿勢がうかがえるところだ。ほとんどがスムーズに進行していったが、サー・デューク間奏部のユニゾンのリフには多少



のノイマンM-269Cは少し古いマイクだが、独特のふくよかさがあってヴォーカルの味やストリングスの豊かなハーモニーを的確に引き出してくれる。この辺りは心憎い選択といえる。

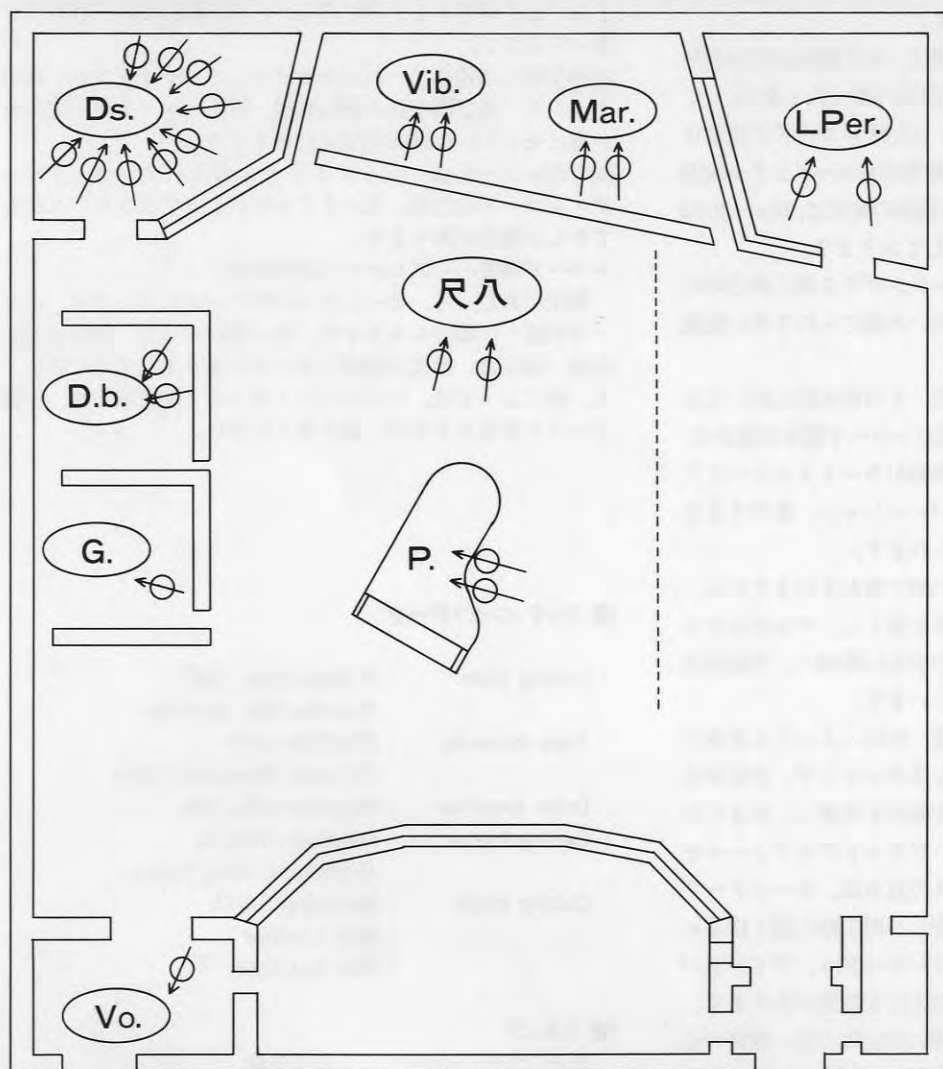


手間だった様子だった。しかし何回かリハーサルした後は気持ちの良い程ピタッと決っていたのは流石だ。マイク・セッティングや使用マイクも非のうちどころがなく、まさに適材適所といった感じであった。尺八とアコースティック・ギターには三研のCU-41というコンデンサー型が使われていたがこのマイクは2ウェイ方式の採用でワイドでフラットな周波数特性を実現している。またローノイズ、低歪だから尺八やアコースティック・ギターの繊細かつ微妙な響きが余すところなく録音されているはずだ。またヴォーカルやストリングス





マイクセッティング



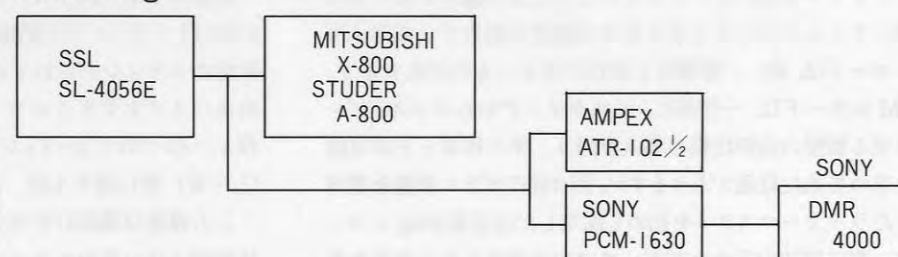
使用マイク一覧

Ds. Toms. SENNHEISER MD-421 × 4
 SDr. SHURE SM-56
 BDr. SENNHEISER MD-421
 HiH. AKG C-451EB
 Top. AKG C-451EB × 2
 D.Bass. NEUMANN M-49C
 E.Bass. BSS DIRECT LINE BOX
 (A)G. 三研 CU-41

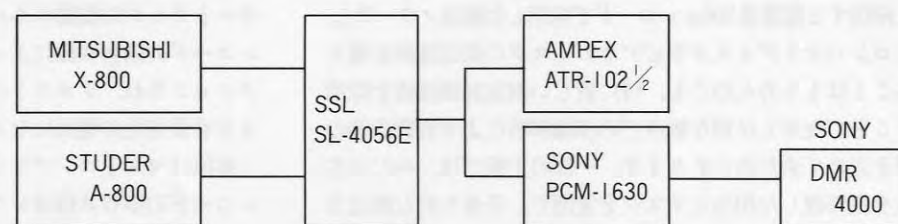
(E)G. JANSEN DIRECT LINE BOX
 LPer. NEUMANN M-269C × 2
 P. B & K 4003S × 2
 尺八. RCA 77DX, 三研 CU-41
 Vocal. NEUMANN M-269C
 Tp. Tb. ASax RCA77DX
 Vib. Mar. AKG C-414EB × 2
 Strings. NEUMANN M-269C × 4

録音ダイアグラム

Recording



Track Down



DAMハイクオリティレコードについて

音楽パッケージもこのところDATをはじめ、CD-V、CD-I等、次々に新商品の開発が具現化し、今回ますます多品種化の傾向を呈し、音楽プログラムに対するアプローチの仕方も更に多様化し、より個性化すると思います。

今やアナログディスクは、完全にコンパクトディスクにその主流の座を奪われ、100年以上続いたアナログディスクと短期間のうちに世代交替したコンパクトディスクの優位性は、まさしく脅威的なものを感じます。しかし、話題に乏しいアナログディスクとはいえ、アナログならではの魅力と常に音の限界にチャレンジしても余りある可能性を秘めているディスクレコードは、尚、一層興味と期待の大きいものがあります。DAMレコードは、一作毎に、マスタリングからメッキ、プレスに至る製盤の最新技術の導入を図り、常に限界とその可能性を求めて来た経過がありますが、前々回のガラス原盤を素材としたラッカーマスターを初めて採用した超重量200gレコードは、真に現状のアナログディスクの市場性とその背景を考えれば、一つの完成領域に到達したディスクであったと確信しております。今回のDAMレコードの特長は、その最高水準と確信する超重量200gレコードで採用した製造ノウハウと、更にコンパクトディスクやビデオディスクの周辺技術を導入することはもちろんのこと、特に新しい測定評価技術を採用することで従来とは別な観点での理論解析により音質改善の対策を進めて来た点にあります。一部の工程では、今だに生産性を度外視した相当なリスクを覚悟で、手造り的な製造方法をとったり、まさしく音質重点主義で進めたアナログディスクの総力を上げチャレンジした、私共の制作ポリシーを、きっと皆様は理解して頂けるものと思います。

それでは今回の特徴を紹介いたします。

ディスクレコードの平面、平滑性は、音質へ影響する重要なファクターでもあり、総括的な意味で音溝波形の成形精度に集約されますが、今回の高品質化のポイントは、この点にあります。

アナログディスクの徹底した性能分析より、ビデオディスク成形の周辺技術を応用したプレス金型を新しく開発することからスタートした、前々回の超重量200gレコードの製造技術とその設備を利用し、今回の160g重量レコード用プレス金型の精度や鏡面性を対処することで、ディスク面のストレス(歪)を最小限に押え込み、忠実な音溝波形を成形しています。更に今回の特徴は、メッキ工程にあり、これはコンパクトディスクの製造ノウハウと設備を採用して、クリーンルーム処理を行い、従来に無い超精密な電解メッキにより、ラッカー音盤の音溝を忠実に転写し、雑音の少ないS/N比の良い原盤を作成しました。

今回は特にディスクの面精度を改善する為に、メッキ工程に於いて、スタンパー作成は特に高密度な電解メッキ方法と

研磨仕上げとによって、優れた平滑性が得られています。

これらの改善により、真円性の大幅な向上とワウフラッターの影響を極力減少させることで、特に低周波数帯域による変調が少なく、全体の分解能力が改善され、楽器の音程がより安定感のある響きと、強奏部での解像力も一枚ペールを剥したような鮮明さは、アナログディスクの魅力ともいえましよう。又、音像の実存感ではまさしくマスターテープのもつオリジナルサウンドの世界だと思えます。

御存知のように、ステレオの音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は、左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、特にDAMレコードで代表されるハイクオリティレコードは、通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされ、音溝幅の変化は、20μ~300μ(L-R)程に達する位、高精度化しております。

この複雑な溝波形を完全にトレーシングする為に再生時の技術的ノウハウやテクニックがいろいろ論じられて来た経過があります。

例えば複雑な音溝になればなる程、その再生時に於いてはカートリッジの振動エネルギーが逆にレコード盤を烈振させ、レコードの固有共振によってその振動がカートリッジヘリアクションされ、クロストーク、セパレーション、歪等さまざまな音質劣化の要因になると考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの固有共振はレコード重量を重くし、マス成分をコントロールすることで音質の影響の少ない帯域へ、共振周波数を下げ、低域特性の改善を図っています。

ターンテーブルや、マットの材質、形状によっても音質の変化があるように、レコード形状も又少なからず、音質変化の要因と考えられます。特に、再生条件を考慮し、今までのフラットレコード以上に精度の高いフラットプロフィールを採用致しました。このフラットネスの良さは、ターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、再生時に起り得るレコードの共振がマットを介して逆にレコードへ、フィードバックされるこのリアクションを緩和させる効果があります。

この様な高密度レコードでは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来から高品質用として開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定効果の高い安定剤の組合わせにより、一層ゲル化性の改善を図り、更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果とあいまってきわめて安定度の高い、S/N比の良いレコードを提供することが出来ました。

以上のように今回のDAMレコードは、現状の最高水準の製盤プロセスを経て制作されております。

デジタルサウンドとの出会いも最近は多くなって来ていると思いますが、是非、このアナログディスクのもつサウンドの魅力を十分に感じ取って頂ければ幸いに思います。

30センチ45回転レコードの 取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変った点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

(1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用できますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱い下さい。

(2)回転が速くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。

(3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく作動しないことがありますのであらかじめ室温を15°C~20°C位に保って下さい。

(4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の磨耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。

(5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

再生にあたって、カートリッジやアームによっては、トレースが難しい場合もあります。特に冬に向って、室温は20°C前後、針圧は、指定の範囲で重い方にセットしてください。又、曲によっては、ハイレベル・カッティングのため、一部ゴーストがありますが、御了承ください。

■ カッティング・データ

Cutting Date	: 3 September, 1987 Toshiba EMI, Gotenba
Tape Recorder	: STUDER A 80 ($\frac{1}{2}$ inch, 76cm/sec., 2ch)
Drive Amplifier	: Neumann SAL-74B
Cutting Lathe	: Neumann VMS-70 Diamond Cutting Stylus
Cutting Head	: Neumann SX-74 Non Limitter Non Equalizer

■ スタッフ

総合プロデューサー	: 小山正敏
プロデューサー/ディレクター	: 里見清司
レコーディング・エンジニア	: 渡部喜久
カッティング・エンジニア	: 原 清介 林 力
ジャケット	: 榊グラバー企画
フォトグラファー	: 伊藤 隆
録音年月日	: 1987年5月11~14 & 16日
録音場所	: 東芝 E M I 第1スタジオ
企画・制作	: DAM 推進委員会 DAMPC
制作協力	: 榊サンデュエット
製造	: 東芝 E M I 株式会社